

日本統治時代の台湾人作家にみる日本語教育の影響

— 陳火泉を例として —

垂水 千恵

要 旨

1895年5月、日清講和条約の批准によって台湾は日本へ割譲された。その後第二次世界大戦の終結までの50年間、台湾は日本の領土として統治を受け続ける。割譲の直後の1895年7月、台湾総督府学務部長心得伊沢修二は芝山巖に芝山巖学堂を設置、台湾における日本語教育に着手し始める。1898年7月には台湾公学校令が公布され、台湾人生徒は公学校と称された初等教育機関で本格的な日本語教育を受けることになった。それが「国語」と「修身」を二本柱とした皇民化教育であったことは夙に指摘されているが、果たしてその教育を受けた台湾人がどのように「皇民化」されたのか、という教育の結果については従来あまり研究されて来なかった。本稿は当時の台湾人がどんな皇民化教育を施され、どんな皇民意識を刻印されたか、という問題を陳火泉という一台湾人作家が残した文学作品から探ろうとする試みである。

[キーワード] 皇民化 日本語文学 皇民文学論争 『臺灣の専賣』

1. 陳火泉の文学史的位置付け

陳火泉は1908年、台湾中部の鹿港に生まれた。父、陳水は漢医であったという。鹿港は台湾で最も古い港町として隆盛を極め、文化人の多い町としても知られていた。陳は7歳の時から3年間、鹿港文開書塾で漢文を習った後、11歳で鹿港第二公学校に入学。23歳で台北工業学校応用化学科を卒業するまで、約12年間の日本語教育を受けている。卒業後は台湾製脳株式会社を経て、台湾総督府専売局製脳課に勤務、新

式の改良竈の発明によって、「全日本産業技術戦士顕彰大会」で表彰されたこともある技術者であった。(1)

陳は1939年頃より台湾専売協会発行の『臺灣の専賣』誌上において度々詩、俳句、随筆等を発表しているが、作家としての本格的なデビュー作品は『文藝臺灣』1943年7月号に発表した「道」であろう。

ここで少々台湾における日本語文学の流れについて概観しておくならば、台湾人が日本語による文学雑誌を創刊し始めたのは1930年代に入ってからで、最初のピークは1935年12月の『臺灣新文學』の創刊である。これは「新聞配達夫」で1934年10月号の『文学評論』に入選した楊達が主催する日中両文の雑誌で、『文学評論』の台湾支部的役割も果たした。(尾崎1991)しかし1937年の漢文欄禁止に伴い、廃刊。しばらく雑誌空白時代が続くが、やがて1940年1月に『文藝臺灣』が創刊される。

『文藝臺灣』は最初台湾文芸協会の機関誌としてスタートするが、1940年3月からは西川満を中心とする文藝臺灣社に発行元が移っている。しかし、やがて西川のワンマンぶりに業を煮やした張文環、中山侑といった作家達が『臺灣文學』の創刊に踏切り、『文藝臺灣』『臺灣文學』の並立時代が1943年12月まで続く。この時期を日本語文学の最盛期と見て間違いあるまい。

こうした日本語文学の流れに陳火泉を置いてみると、いくつか彼の特色が浮かび上がって来る。まず1943年7月という陳火泉のデビューは太平洋戦争勃発以降の、最も皇民化運動が激化した時期であること。またその時期に活躍した台湾人作家の殆どが『臺灣文學』を發表誌として選んでいる中で、敢えて国策的傾向の強い『文藝臺灣』を選んでいること。さらに、当時日本語で創作した台湾人作家の大部分が日本留学の経験を持っていたのに対し、陳には留学経験がなく、従って、彼の日本観はある意味で非常に「純粹」に、台湾における日本語教育を反映したものであると言えること、等である。

これらの陳火泉の特色は必然的に「道」の内容とも関係してくる。そこで2章においては、「道」の内容を簡単に紹介するとともに、「道」をめぐる戦後の皇民文学論争について触れることにする。

2. 「道」の内容及び皇民文学論争

「道」は専売局製脳課に勤務する台湾人の「彼」が、皇民でありたいと思いつつも様々な差別に出会い、ノイローゼに陥る、しかし、ふとしたきっかけで、自分の考えは台湾語による台湾人の発想であったことに気付き、これからは国語（日本語）で考えることを決意すると同時に、陸軍に志願して行く、という内容の小説である。

「道」は発表されるや否や、皇民文学として熱烈に歓迎され、すぐさま『皇民叢書』のIとして単行本化されている。これが如何に例外的な事であったかは、林瑞明（1993）の指摘にもある通りである。ところが戦後になって、「道」は皇民文学ではなかった、とする論調が現れ、現在に至るまで結論が出ていない。「道」を皇民文学と見るか否かの問題は、陳火泉を論じる際に避けて通ることのできないアポリアであると思われるので、ここで簡単に論争の流れを概観しておく。

恐らく戦後最初に、「道」は「当時台湾人皇民化的苦悶、矛盾和衝突」を描いたものであるとして「道」再評価の契機を作ったのは陳少廷（1977）であろう。この立場をさらに積極的に押し進めたのは鍾肇政で、彼は「道」は「可憐的受害者的血淋淋的記録」（1979）「在苛政与暴虐下、為痛苦的抗議文学」（1982）であると評価したのみならず、陳に中文版「道」発表の機会を与え、文壇復帰へと導いた。鍾と大体立場を同じくするものに葉石濤（1990）、黄武忠（1980, 1984）等がいる。塚本照和（1982）、星名宏修（1990）といった日本人研究者も、概ねこの流れを汲んでいると言って良いだろう。

一方、1979年7月7日から8月16日にわたって中文版「道」が「民衆日報」に掲載されたことに対し、李南衡（1979）は強い調子で批判している。また林瑞明もその論文（林1993）の中で、「事が『モラル』のレベルに関わるとすれば、皇民文学／抗議文学の空虚な二者択一の間で、問題の所在をぼやけさせてしまうわけにはいかない」として皇民文学としての「道」の道義的責任の追及を提案している。日本人研究者としては尾崎秀樹が早い段階で「道」は「精神の荒廃」（尾崎1991）であると断定、垂水もまた陳の為政者の論理に迎合しやすい体質について論及し、「道」の皇民文学性を曖昧化しようとする葉達への疑問を呈して

いる。(垂水1992a, 1992b)

筆者は本稿において再びこの論点に立つとともに、先行文献では触れられることのなかった『臺灣の專賣』誌上に発表された陳の初期作品をもとに、陳火泉における皇民意識の存在を明確化させるつもりである。しかし、その目的は陳火泉個人の過去の功罪を問うことにあるのではなく、その皇民意識の皮相さを論じることで、戦前の日本語教育の奇型的一断面を描き出し、「台湾における日本語教育は成功であった」という通念に具体的に反証することにあることを先に断っておく。

3. 『臺灣の專賣』における陳火泉の活動

『臺灣の專賣』は台湾専売協会発行の雑誌で、いわば専売局の機関誌といってよいだろう。公的な記事のほか、俳句、座談会など、娯楽的な要素も多く、同人誌的な雰囲気がある。陳火泉は1939年8月頃から「青楠生」「高山青楠」「青楠山人」等のペンネームを使って、しきりと登場して来るが、その発表内容の多くは国策迎合的なものである。そのすべてをここに紹介することはできないが、特に皇民的傾向の強い部分を引用することで、作家として登場して来る前の陳の思想的立場を明らかにしておこう。

「新しき山」青楠生(1939.8)

…国民が如何なる職場に在るを問はず、その職に励むことが国家に奉仕する所以になる。(中略)このことは、日本人なら誰一人としてできないものはない。三千年もの永い間の伝統日本精神はそれを可能ならしめる。

だが、いわゆる新附のわれわれ本島人は学ばねばできない。

「勤行賦」高山青楠(1939.10)

…老いも若きも男も女も一億一心もて時代の波に体当るる雰囲気これ即ち日本精神の発露にて、至純なる国民感情の顕現なり。

蓋し、最高の中心的絶対的目的価値たる皇位を中核として発動し、そこに於て統一さるるものこれ即ち日本精神の本質にして、而してこの精

神の主体的本質は清明心ほかならざればなり。(中略)

観よ、一同の朗らかに張り切るるばかりの勤行振りを。そこには、ただならぬ時代のリズムを感じ、美しき日本精神の漲れるを感得するならん。

秋日和勤勞奉仕励みあひ
草刈るや上司下僚の分ちなく

タイプスト並びかがみて草を刈る
草を刈る音さくさくと萱の中
秋空へ八紘一字の意気高し

「名譽の家—俳句幻想曲—」陳青楠(1940.7)

…一家を支へる柱が東亜建設の人柱となってから、生活が日に日に苦しくなった。しかし、賢い母はよく耐え忍んだ。(中略)

母 お父さんがね、今度靖国神社に祀られるの、そして、お父ちゃんがね、またあたしたちを、草葉の蔭、いいえ草葉の蔭ではないわ、もう神様になったんですもの、護国の神様におなりになさったんですから、とてもとても高い処から、あたしたちを守って下さるわ、またあたしたちを可愛がって下さるわよ。

「日本国民性を讃へる」陳火泉(1940.10)

…聖戦に身を棄つる生産に	身を捧ぐるも殉国なりけり
邪きを袪ぎ異きを弑ひたる	この血潮もて聖業成るなれ
ひたぶるに天皇陛下万歳と	唱へまつるは日の本の民
榮あるもの選ばれたるのもその名は	日の本国日の本の民

マ マ

我が身を詠める
日の本の民とは思ふ現身に
その血なきこそ物悲しけれ

「僕の内観語録」陳火泉(1940.11)

日本国民を死して甦らせ給ふのは、天皇御一人であり、天皇陛下万歳

を叫んで死に得るものは、皇民のみであり、一身を捧げて国に殉じ得るものは、日本国民のみである。

「私の俳句観序説（二）」陳火泉（1941.2）

…だが、その血を持ち合わせてゐない、いはゆる新附の民である私共台湾人が日本的自覚に到達するまでには、それ相応の段階を経ねばならぬであらう。先づ第一に知ることである。日本及び日本人、日本精神、日本的なものを知ることである。

日本及び日本人、日本精神、日本的なものを知るには、どうすればよいか、と尋ねられたならば、私は、先づ俳句に親しめ、次に俳句に親しめ、而して遂に俳句に親しめ、と応へるに躊躇しはしないのである。

「私の日本国民性観」陳火泉（1941.4）

…すなはち、純大和民族はそれらの異民族を血統に於ても精神に於ても全く同化融合し終へてゐることは、史実によって明かにされてゐる。そして、かうした異民族の同化融合は、単に過去のみの問題でなく、現在に於ても行はれつつあり、はた将来も永へに営まれて行くべきものであらう。現在の朝鮮・台湾民族なども、やがては日本民族に一元化せられるであらう。

4. 結論

こうして見てみると陳火泉の皇民意識はあまりに明白であらう。確かに「道」には自分を軽んじる同僚への不満、遅れる出世への絶望、「台湾人は〇〇ではないからな」⁽²⁾ と言いつつ上司への怒りといった感情が描かれている。しかし問題は陳自身がどんな論理でそれら差別に対峙しているか、ということである。「道」の「彼」は言う。

日本精神、私は日本精神を日本人の—この場合は日本人を生れながらの日本人、更に平たく申せば、内地人と限定するものとして—この日本人のもつ精神を日本精神と理解したくごさいません。生れながらの日本人の中にも日本精神を母の胎内に置き忘れてきたやうな

ものがある筈です。

「彼」が否定するのは、あくまでも一部の日本人であり、「日本精神」そのものではない。『臺灣の專賣』の発言からもわかるように、差別の根本にある植民地制度、或いはそれを支える天皇制に対する批判の視線は陳には存在しないのである。むしろ過激なまでの天皇制原理主義によって、民族差別の壁を破ろうとしているかの如く見える。その意味において陳が「『一視同仁』のもう一つの面－差別からの脱出の論理－に賭けようとした」（星名1990）という読みは正しい。しかし、だからといって星名の言うように陳が台湾人全体の救済を願っていたとは到底思えない。陳の思い描く救われるべき台湾人とは「本島人らしからぬ鋭さ」（「道」）を持つ陳一人だったのではないか。「道」の重要な登場人物が「彼」以外すべて日本人であって、台湾人は登場しないように、陳火泉の思想に連帯すべき台湾人は存在しなかった、と見るべきだろう。

『臺灣の專賣』1941年6月号には「製腦第一線座談会」と題された座談会記事が掲載されている。そこには「青楠先生、あなたほどのものが」と日本人から敬称で呼ばれ、「陳さんが改姓名してくれたら心強いと思いますね」と持ち上げられて「いや御喜び下さい。もう『我が闘争』が終った。近い中に改姓名許可願を提出する運びになってゐます」とやにさがる陳の姿が記録されている。

もしこのような「日本人」を作ることが台湾統治の目的であり、陳がその誇るべき成功例であったとすれば、一体何を以て「台湾における日本語教育は成功であった」とするのであろうか。恥ずべき「精神の荒廃」（尾崎1991）を大声で叫ぶことにのみ日本語教育は奉仕したというべきであろう。

もちろん、陳火泉自身の「個性」は考慮しなければなるまい。戦後、多くの台湾人作家が日本語から中国語への切り替えができず沈黙して行く中で、陳は語学的才能を生かし、中国語作家として復帰。国民党迎合の中華文化主義を標榜する随筆を多数発表している。（垂水1992b）こうした陳火泉の権力迎合的体質までもが日本語教育の結果であると言えば、あまりに教条主義的であろう。楊逵、呂赫若といった抗日、抗国民党的作家においても或る種の良質な日本文化の影響は否定し得ないことも、

また一つの事実であるからである。

しかし大濱徹也(1992)の指摘にもあるように、本当に言語教育は国家イデオロギーから自由であり得るのか、という論議のなされないままに再び隆盛を極めつつある日本語教育に対する一つの警鐘として、陳火泉的存在を生み出したことの責任を、もう一度問い直す必要があるのではないだろうか。(3)

- 註1 陳火泉に関する年譜は『我思我行』（九歌出版1987）附録の「陳火泉年表」に従った。
- 註2 「道」が陳自身の手で中文訳された際（『民衆副刊』1979.7.7～8.16）、「此處○○原稿作『人間』、発表時被改為『○○』」という註が付けられた。
- 註3 大濱（1992）は「日本事情」には「日本の生活文化への同化をうながす眼が強くみられる」が、これは「戦後の日本語教師が国家イデオロギーと『無縁』な存在として、『語学教師』に徹することで自己の場を設定したとはいえ、逆に内実においては強く国家に呪縛されている」ためであると論じている。

参考文献

- (1) 尾崎秀樹(1991)『近代文学の傷痕』, pp. 104-193. 岩波書店（初出は『文学』1961.12, 1962.4、ただし補筆あり）
- (2) 林瑞明(1993)「決戦期台湾の作家と皇民文学」若林正文他『近代日本と植民地6』, pp. 235-261. 岩波書店
- (3) 陳少廷(1977)『臺灣新文學運動簡史』聯經出版
- (4) 鍾肇政(1979)「日據時期臺灣文學的盲點—對『皇民文學』的一個考察」『聯合報』1979.6.1
- (5) 鍾肇政(1982)「文學的苦行僧—談『人生三書』作者陳火泉—」『中央日報』1982.6.30
- (6) 葉石濤(1990)『台灣文學的悲情』派色文化出版
- (7) 黃武忠(1980)『日據時期臺灣新文學作家小傳』時報文化出版
- (8) 黃武忠(1984)『臺灣作家印象記』衆文圖書

- (9) 塚本照和(1982)「紹介；陳火泉の『道』」『臺灣文學研究會會報』
2号
- (10) 星名宏修(1990)「『大東亜共栄圏』の台湾作家」『野草』46号
- (11) 李南衡(1979)「日據下臺灣新文學的抗日精神」『中華雜誌』
1979.8
- (12) 垂水千恵(1992a)「陳火泉論－日本統治時代の日本語文学論Ⅱ－」
『日中言語文化比較研究』1号
- (13) 垂水千恵(1992b)「三人の『日本人』作家」池澤夏樹他『越境する
世界文学』, pp. 252-260, 河出書房新社
- (14) 大濱徹也(1992)「日本語教育と日本文化」『日本語学』11卷3号

(横浜国立大学留学生センター講師)